

# 米軍と一緒に戦争できる自衛隊に変貌 オリエント・シールド21監視行動を終えて

別海町・矢白別平和委員会前事務局長 吉野 宣和 (88)



監視行動に集まった参加者と (21.6.26)

政府は「島しょ防衛」として、尖閣列島などへの中国からの「防衛」と称して訓練を拡大強化しています。本当にそうでしょうか。

防衛省は、日本国内で自衛隊14000人と米陸軍16000人が参加する過去最大規模の日米共同演習(オリエント・シールド21)を実施しました。その訓練の一部として長射程訓練に耐える矢白別演習場において、6月28日〜7月1日までロケット砲の実射訓練が行われました。

## 「自衛隊の米軍一部化」 がすすんだ訓練

今回の訓練の特徴は、日米がそれぞれ持ち込んだ火砲を別々に射撃するという従来の訓練が形を変えて、敵の位置情報を

日米で共有し、同じ目標に向かって共同で射ち込むというより緊密化した訓練が実施されたことです。米軍が持ち込んだ高機動ロケット砲システム(HIMARS)と陸自の多連装ロケットシステム(MLRSS)を、10キロ離れた同じ目標に向かって交互に撃ち込むという実戦的訓練がマスコミに公開されました。「日米の一体化」どころか「自衛隊の米軍一部化」がすすんでいるとみるべきだとの声があがっています。同じ時期に九州の奄美で行われたオリエント・シールド21は、米軍と自

衛隊との対空ミサイル訓練でした。これは九州から南西諸島、そしてフィリピンに至るまでの各「島しょ」でのアメリカによる対中国封じ込め作戦(インサイド・アウト防衛)の一環として行われており、これが「島しょ防衛」の実態です。連憲の「安保法制」以降、日本の防衛とは関係のない、米軍と一緒に戦争ができる自衛隊に大きく変貌していると言わざるを得ません。

朝8時30分から監視アクトに詰めかけ、4日間に84発の実射をカウントしました。最終日には音量測定も実施しました。ランチャーを飛び出したロケット弾が音速を超える瞬間の衝撃波はさすがに、最高値は97・2デシベル、38発の平均は90デシベル超。「うるさくて我慢の限界を超える」域であることを実感しました。監視アクトにも変化が見られました。連日20人前後の労組員や平和委員会、農民らが参加、4日間で延べ80人を超えました。新婦人の会は毎日2人ずつでおいしい昼食を提供してくれました。鉾路市からは若い人たちが連日「研修」という

4日間延べ80人で監視行動 若者の姿が

現地の矢白別平和委員会や新日本婦人の会別海支部、別海農民組合など鉾路地区労働組合総連合など共同して現地監視本部を設置、全期間、

ことで参加、それぞれテーマをもって矢白別の施設や良物を調べたり、発射弾カウントに参加したりしていました。熱心に先輩の話を聞く姿もあちこちで見られました。最終日には札幌の学生さんら9人が訪れ、取材をしていました。一方、別海と西春別両市街で6月19日と20日の2日間、「日米共同演習反対」「戦争はコロナを連れてやってくる」など手書きのカラフルな横断幕やプラスタターを掲げているスタンディングも行われました。労組と平和委など住民組織との連携、さらに多くの若者を加えた今回の監視行動に希望が湧く思いです。